

雨



Aブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

雨の降る日に

雨の降る日に僕は傘に尋ねた。

「雨は好きかい？」

彼は答えた。

「嫌いだよ。彼が来たら僕は全身アザだらけで、そのままねじられる。もう耐えられないよ。」

雨の降る日に僕はレインコートに尋ねた。

「雨は好きかい？」

彼女は答えた。

「嫌いよ。彼が来ると私の鮮やかな色が色あせていくの。」

雨の降る日に僕は雨に尋ねた。

「雨は好きかい？」

彼は答えた。

「嫌いですよ。私は嫌われ者ですから。それに高所恐怖症なんです。だけど、そんな私を待っていてくれる人がいるんです。」

雨の降る日に僕は僕に尋ねた。

「雨は好きかい？」

僕は答えた。

僕は雨が降るのを待っていた。

雨乞い

とある崖の上に設けられた祭壇、僕はまさに今そこにいる。真下に広がる巨大な穴、それは恐ろしく不気味で時々頭がクラツとするほどだ。いや、それは真上にある太陽のせいでもあるだろう。後ろからはたくさんの太鼓の音が聞こえる。僕は落ち着こうと、深呼吸をして深く眼を閉じた。

僕はこの村に生まれてから一度も雨を見たことが無い。そもそも雨というのが何なのかさえ分からない。その雨というものが降らないせいで作物はほとんど実らず、食料は尽きる一方。幸い僕の父がこの村の代表、言わば長老ということで、村の人々の貢物のおかげで食べ物心配はいらなかった。が、その分日に日にやせ細っていく村人を見るのは心苦しく、罪悪感が僕の心をきつく締めつけた。

そういうこともあって、とうとうこの村でも雨乞いが行われることになったのだが、不幸なことに、「生贄献上役」という何ともありがたくない役を請け負うことになった。生贄の女性を崖の下に突き落とす、簡単に言えばそういう役だ。そもそも雨乞いという非科学的な儀式を行う意味が分からない。大人たちはみんな頭がおかしくなってしまうのだろうか。雨乞いなんて人一人殺すだけだということに気がつかないのだろうか。例えば僕がそれを言ったところで状況が変わらないことは分かっている。分かっているのだけれど……

僕はゆつくりと眼を開けた。儀式なんか始めから無かった、そう期待して眼を開けたのだが、当然そんなわけはなかった。さっきよりも僕の影は短くなっていた。ひどく暑い。僕まで頭がおかしくなりそうだ。

生贄の女性が階段を上って来た。僕と同じくらいの年齢だろうか。うつむいているせいで顔は良く見えないが、怖いに違いない。僕は一層の憤りを感じると同時に、この後行うことに改めて恐怖を覚えた。逃げたい、できることなら今すぐにでもここからいなくなりたい……。

太鼓の音が止んだ。とうとう来たんだ。心臓の鼓動が恐ろしく早い。足が震える。

僕は彼女の後ろに両手を構えた。暑さもあって立っているのが精一杯だ。逃げたい。が、もう逃げられない。僕は軽く一歩後ろに下がりを、意を決して彼女の背中を突き飛ばそうとした。その時、

「生け贄は私じゃない」

え？

僕は飛び起きた。ここは……僕の家だ。それじゃあ今までのことは夢……？ いや、疲れて思い出せないだけだ。それよりも、最後の彼女の言葉が気になる。私じゃない、って一体……。

とにかく、今は休もう。何十年分の体力を使い果たしたみたいに体が重い。皮肉にも儀式は成功したらしい。窓の外に目をやると、いつものように雨が降って……あれ？

いつものように？僕は雨を、知っている？まさか、そんなはずは……。

思い出した。同時に思い出したことを後悔した。やっぱり夢だったんだ。

雨乞いなんて最初から行われなかった。僕が見たことが無いもの、それは「太陽」で、この村では晴れたことが無い。それ故作物が実らないのだ。そして今日、儀式が行われる。

その儀式とは、「雨止み乞い」

生け贄は、僕だ。

『雨宿り』

ザー

雨が降ってきた。こんな日、君はバスで帰る。

急いでバス停に走ってく。そしてそこに君がいた。

学校の指定の制服も君が着ると別物みたい。

君のことが好きなのに、君の前では何も話せなくなる。

何も話せないまま、気まずい雰囲気すぎていく。

何か話しかけたいのに。

遠くから見ること慣れている僕は何も話しかけられない。

ちゃんと話せないだろうし、つまらない話して嫌われてしまうかもしれない。

でも何もしなければ何も発展しない。

勇気をだして話しかけよう。そう思った。

そしてたもう時間切れ、バスが道の先からやって来る。

はあ、今日も何の進展もなく過ぎてしまうよ。

そうあきらめバスに乗る君を見ていると

ねえ、うちに来る？

そう言ってくれた。

そんな君を好きになったんだ。

野良犬の僕

明日天氣に……

——一緒に帰らない？

その時、俺は友達とカラオケへの道を歩いていた。俺にとって、そいつからのメールなんて日常。内容も、悪いムリ、と一言返せばよさそうなもので、わざわざこの雨の中を引き返す必要なんてないはずだった。……けど、俺は友達と別れ、今来た道に戻ることにした。その一言が、どうしてもアイツと重ならなかったのだ。

下校する学生たちの波に逆らい学校に辿り着くと、見覚えのある水玉模様の傘が、門のところで独り佇んでいた。その傘が翻り、アイツの目に俺が映る。それと同時に微笑みがふわりと開き——でも、アイツはそこから動こうとはしなかった。

「なんだ。悪いことしちゃったかな」

俺がわざわざ戻ってきたのを見てか、彼女はそんならしくない台詞を吐いた。すぐそこだったから、と戸惑いながらも応える、にしては遅かったね、と元氣のない憎まれ口が俺の脇を抜けていった。慌ててそれに追いつき、隣に並ぶ。それからしばらく、二人のあいだに会話はなかった。

「……ねえ。ちよつとだけ、寄りたいところがあるんだけど、いいかな……？」

学校から少し歩いた交差点で信号待ちをしている時、俺を見ずに彼女が言った。虚を突かれ、数秒を置いてからうなずくと、直後に信号が青に変わり、ありがと、と小さな声を残して彼女は歩き出した。

——彼女の寄りたい場所までは、そこから歩いて五分ほどかかった。晴れていても人がいるのかどうか怪しい小さな公園。何も言わずにそこに入ると、彼女は何を思ったか突然傘を閉じ、両足でブランコに乗ってそれを力いっぱい漕ぎ始めた。

「——で、どうしたんだよ、一体？」

ブランコの前に立ち、思い切って訊ねると、彼女は漕ぐのをやめた。ブランコの勢いが弱まり、揺れが収まっていく。

「今日、さつきね——先輩に、言ったの」
胸の奥が、痛んだ。そうか、アイツに言ったのか……。けど俺は、そんな内心は表に出さず、黙ってその先を訊いた。

「ちゃんと、分かってたんだよ、勝ち目なんか無いって……。それでも、けじめだけはしっかりつけたくて……。」

でも、ね——やつば、それでもどうしても——胸が痛くて、目が熱くなつて……。だけど、他にも人いたし、泣いたりしたら……困らせちゃうから……」

我慢してたのか、今の今まで。つぶやくように言うと、あはは、と震える声が雨音を縫って聞こえた。表情だけは笑顔で。

「やつば、バレたか、こんな雨降つても。——でも、変だな……なんで今更……。大丈夫……ちゃんと納得、してる、よ？」

手すりを離れた白い手が、ごしごしと顔をこすった。それが雨なのか涙なのか、見分けなんて確かにつかないけど——
「分かつてるよ」

鞆を肩から下ろし、握っていた傘も放り出して、ゆつくりと足を前に踏み出す。ブランコに乗っているにもかかわらず、彼女の目線の高さは俺と同じだった。そつと手を伸ばし、俺はその頭を撫でた。

「ちゃんと、分かつてるから」

「ごめん、ね——。いつも、相談とか愚痴とか……いつも、頼つてばっか、で——」

「バカ、謝らないでいいんだよ」

撫でていた手を頭の後ろに回し、俺はそのまま引き寄せた。小柄な身体が宙に浮き、胸の中に飛び込んでくる。

——別に、お前の一番じゃなくていい。ただ、お前が笑ってくれればいいから……。

「俺でよければ、いつでも聞くから」

「ごめ——うん、ありがと……。」

ねえ、あともう少しだけ……。明日、また元氣に行きたいから——いいかな？」

うなずく代わりに、俺は、腕の中の体温を強く、強く抱きしめてやった。俺たちを包む雨が……少し、弱まった気がした。

傘っておかしくね？

メガネはコンタクトになったよ。鉛筆もシャープンになった。すごい便利。でもなんで傘は未だに傘なんだ？

実に原始的で不便な道具だ。手は塞がるし、かばんは濡れるし、足元だって濡れる。傘が濡れてもそのまま持ち歩かなきゃなんないし、それを干すときには場所を取る。台風のときこそ出番のはずなのに、危なくて使えやしない。電車から降りて気付いたときにはもうどっかいつてる。

この便利な世の中、傘に代わる画期的な雨具が作られてもいいはず。みんなが思ってる。そしてネオ雨具の形状を検討しながら歩く雨道。結局これといって何も思い付かない。そんなわけで傘は何百年も前からほとんどこの形のまま。たかが水滴に翻弄される日々。

楽しみにしてた今日だって突然の雨。街には特有のほこり臭さが広がり、横断歩道を小走りで渡っていく人々。

やっぱり良純は信用ならんね。俺は鞆に入りっぱなしになっていた折りたたみ傘を取り出し、バキバキとそれを開いた。

「うわー、傘なんて持ってきてない」

「じゃ、相合傘です」

小さな体を小さな傘に招き入れる。これは俺の左半身がずぶ濡れになる気がする。でも、この狭い傘の中だけに広がる、君のシャンプーの匂い。

君と知り合って、もう二ヶ月になるのか。女の子を前にすると日本語すら危なくなる俺が、「一緒に映画でも」なんて勇気出したはいいけれど、こうやって二人きりになると、だんだん話題がなくなつて。

そんなことでいくらか曇り気味だったムードに、ちよつとした刺激を与えてくれる雨だったんだ。

「なあ」

「なに？」

やつぱ無理だろこれ。付き合おう、なんて言えたもんじゃねえ。えーっと。

「傘っておかしくね？」

今日だけは不便な傘と良純に感謝しよう。

産業廃棄物が染み込んだ地に、黒い煙で穢された雨が降り注ぐ。その勢いは留まるところを知らない。やまない重度に汚れた天の恵みは、新たな生命を生み出す。

…ああ、俺等は自由だ！とうとう進化を遂げたのだ！奴等を滅ぼすのだ、我らが同胞を斬殺して私腹を肥やしてきた人間どもを！

環境の激変による組み込まれた遺伝子プログラムの覚醒と変貌。彼等はただ滅びゆきなどしない。自らの可能性を最大限に引き出す。生物に必要な不可欠な酸素も嘗ては猛毒であった。

…奴等は俺等を全滅させようとしてきた。しからばこちらも手を打たぬわけにはいくまい。祭りの始まりだ。

汚染された集中豪雨が彼等を誕生へ導き、破滅の歯車を動かし始める。闇夜に流れる木葉の囁く旋律。一瞬辺りが青白く染まり。土の香る地面に写る、振り返った枝。

普通の夜の光景。異なるのは木々がゆっくり移動していること。やがてそれらは建物に至る。根が伸び窓を伝い空間を満たしゆく。どこかで叫び声があがる。しかしすぐに潰れた小さい声になって消える。少しして窓際の根に緑が芽吹く。そよぐ木の葉。

緑が町を包む。美しく包む。

小雨が奏でる安らぎの音楽。そして時が流れて…

満月が優しく辺りを照らす。月夜に訪れた静寂。

ビルを覆う淡緑から一滴、雫が煌き落ちる。

それはアスファルトで弾け、大気を僅かに震わせた。

「本心」

あー
めんどくせえ

ことわざ一口解説講座

雨降つて直田丸麻紀

たとえば雨が降つてテンションがた落ちの時でも、直^{じか}で田丸麻紀に会つて、彼女が傘を忘れ自分の傘に入れてやり、相合傘で一緒に帰つたりでもしたら一氣にハッピーになれるという意味。つまり悪い事があつても、かえつて幸せとなる事もあるよということ。ちなみに田丸麻紀とは筆者の大好きな、とても美しい女優さんである。

類義語

泣きつ面に長澤まさみ

【「魔が差す」もとい「正義が差す」】

……一年前と最も大きく違うのは週三回、バス停からの帰り道が一人になることだと、明彦は考えていた。特にこんな雨の日は、なんだかとても怖くて、自然と急ぎ足になる。

だがその帰り道もあとは、この公園とゴミ捨て場の間をまっすぐ進むだけ……というところで、彼はゴミ捨て場に一つの人形を見つけた。

「あれ？これって……えーっと、ゼロレッドだ！」それは、十年以上前の特撮ヒーローだった。無理を言ってお爺ちゃんに買ってもらった「戦隊大図鑑」に載っていたので、なんとなく覚えていたのだ。

ゼロレッドの人形は、雨に濡れながらも、雄々しく右手を天に伸ばしていた。明彦はこの人形を持って帰ってあげたかった。だけど頭の固い母親に見つかったら、結局捨てられることは目に見えて……

……明彦は意を決した。ゼロレッドを右手に掴むと、公園の、あじさいが咲く綺麗な場所に運んだ。そしてその人形が濡れないように、自分の傘を被せる。そして雨に濡れないように下を向いて……でも、少し胸を張りながら、雨の中を駆けていった。

次の日の朝、母親に手を引かれながら、明彦は公園の中を、それとなく覗いてみた。

「あれ？」

ゼロレッドはいなかった。明彦の傘も消えていた。

明彦は、自分の胸がドキドキするのを感じた。

（あのゼロレッドは、本物だったんだ！）

明彦は保育園で、その出来事を友達に喋った。

明彦と同じように興奮する友達もいたが、中には大人びた子もいた。

「そんなのいるわけじゃないじゃん！だっせー」

「いたよ！絶対にいたんだ！」

明彦はその子とついには取っ組みあいまでした。だけど体格的には小さな明彦は、善戦したのだが、結局負けてしまって、泣かされるはめになった。

今日ばかりは、母親を迎えに来れなくて良かったと、明彦は思った。ペソをかいいた顔を、見られないで済むからだ。

トボトボと昨日、ゼロレッドと逢ったゴミ捨て場を通る——そのときだった。

「その少年、加瀬明彦くん？」

ビクツとして振り返ると、一人の青年が立っていた。

青年の右手には、黄色の傘が……それは間違いなく、明彦の傘だった。

「この傘、ありがとうな」

「……お兄さん……ゼロレッド？」

青年は傘を手渡したが、明彦はそれには目も移さず、青年に尋ねる。明彦の目には、涙が滲んできた。

「……うーん……みんなには内緒だぜ？」

青年の答えに、明彦の顔はパツと明るくなった。

「やっぱり本当にいたんだ！」

……でもなんで、みんなには内緒なの？」

明彦は疑問を口にする。できるなら自慢したかった。

「それは……俺は君の、ここにしかないからだ」

青年は柔らかな笑顔を見せて、明彦の胸を小突いた。

「正義は語るもんじゃない、そっと胸の内に秘めておくんだ。俺に傘をかけてくれた優しさ、それをいつまでも忘れないで、磨いていつてくれれば、きつと——君は、正義の味方になれる」

明彦は目を輝かせて、真剣にその言葉を聞いた。

そしてやがて、青年の胸ポケットから、ピピピ、という電子音が聞こえた。

「……っと、もう行かなくちゃ。……何かに迷ったら、左胸の声を聞くんだ。考えれば考えるだけ、正義は強くなる——では、さらば！」

そういうと、青年は風のように走り去っていった。

……明彦は、青年が小突いた場所に手を置いてみた。

——強い鼓動が、たしかに聞こえた。

……隆宏は、やがて後ろに誰もいないことを確認すると、大きくため息をついた。——そして今さっきのことを思い出して、頬を赤らめる。

「あーもう！……まったく何言ってるんだよ俺！」

……そう、彼はゼロレッド人形の持ち主であり、昔のおもちゃをまとめて処分しようとしたとき、たまに少年の姿を見て、そして傘を返そうと思ったのだが、彼の泣きだしそうな顔を見て、ついあんなことを言ってしまったのだ。その照れという名の恥ずかしさを誤魔化すために、顔を「しごし」と擦る。

……だが彼はしばらくすると、ふと動きを止めた。

「……ま、でも、あれは本当にかっこよかったよな」

隆宏は昨日のことを思い出していた。傘を与え、颯爽と立ち去る少年の姿は、本当に格好よかったのだ。

「左胸の声、ね……」

隆宏は自分の言葉を反芻しながら、心臓に手を当ててみる。走った後だからか、赤面したからか、

——やけに音は強かった。

日本の将来が危ぶまれる理由と現代の若者の心

窓の向こうは雨、そんなこと俺には関係ない・・・

大学受験は思っていた以上に辛いものだった。周囲からの期待、豪雨の如し。長い受験期を無事終え、晴れて大学生になった俺は虹の世界に突入した。そう、二次の世界にである。

高校ではあの厳つい数学教師に微分で次数を減らすことを無理矢理叩き込まれたが、大学生になった俺は自ら望んで三次元の世界を捨て、二次元の世界へ突入した。

これまでの人生の中で培ってきた国語能力は、ウェブチャットで用いる、一般人には摩訶不思議な言語を習得するのと引き換えに、崩壊した。

アニメの見すぎで視力を失った。アニメの新番組が始まれば予習、第二期の放送が決定すればその前作の復習は欠かせない。

夜通しでネットゲームをするようになると、昼間の友人との付き合いが悪くなり、クラス内で孤立するようになった。しかし学校が寝床な俺にはまったく気にならない。

以前女の子にモテたくて気に掛けていたファッションもどうでも良くなった。毎日その形を変える寝癖は俺のチャームポイントだと思っている。

「萌える」という単語を日常的に用いるようになる。(例：○○たん萌えー★) また、アニメやゲームのキャラの口癖を自らの日本語表現の体系に取り込むようになる。

次第に授業にも出なくなる。だって友達いないからつまんないし授業中寝てるだけならわざわざ大学行く意味ないんだもん。単位って何？それっておいしいの？

大学よりも聖地・秋葉原に通う頻度のほうが高くなる。マンガやライトノベルの最新刊のチェックは欠かせない。うわあ・・・あのフィギュアも欲しいなあ・・・

留年決定。別に退学なわけでもないし、留年ごときで俺の二次元ライフになんら影響なんてないんだよ！ふははは・・・

厳しい世間の雨に打たれた少年の心を癒すものは二次(虹)の世界である。しかし、それはあくまで理想の世界。雨は止まずに、少年の心だけが病んでいく。

RAIN BOW

「ごめんなさい、友達のままで…」

勇気を出して気になるあの子に告白してみた。結果はごらんの通りだが。

もうこれで何回目だろうか：気になる子にアタックするも振られ続けて早十九年。流した涙は星の数。やはり全ては顔なのか…？

いくら考えても男の自分に女の子の気持ちかわかるわけもなく、ただ去りゆくあの子の背中を見守ることしかできない自分が悲しくなる。

最近いいことがないなあ。この前あった学校のテストも単位落としそうな結果だったし、仲の良かった友達とも喧嘩してからまったく連絡を取っていない。日曜の同窓会に来るはずだったお目当ての女の子も土曜にドタキャン。家に帰っても親にガミガミ言われて宿題に追われる日々。あ…：早く休みにならないかな…

今の自分を例えるなら雨雲。流した涙が雨粒といったところだろう。どんなよりと暗いオーラをまとっているのが自分でもわかる。お先真つ暗というやつだろう。

…自分で言っていて泣きたくなるが。

でも実際の雨はずっと降り続くことはないよね。雨粒は雲から出来るのだから、雨が降り終わったら必ず晴れの日が来るはずだ。今がどんなにっらくとも、この涙が報われる日が必ず来るはずだ。

今の自分を例えるなら雨雲。だけど、雨の後にこそ虹は出来る。いつか虹を手に入れる日が来ることを信じて、今日からまた頑張ろう。

酸性雨について

テーマ決定の理由

現代の環境問題において、最も大きな被害をもたらしているのは酸性雨だと思う。なぜなら、酸性雨の威力は本当に大きなものであり、それを死因として、私たちの仲間は大量死んでいたのだ。ここ数日の記録では、1国、1日あたり1万もの死亡者が出ている。これは見逃してはならない事実である。以上の理由から、酸性雨の被害について調べてみた。

実験

梅雨の時期、傘を絶対に利用しないで1ヶ月間生活してみる。

結果

1週間たらずで色は抜け、ほどよい加減の茶色になった。
もともと多かったわたしの仲間のうち、ほとんどさよならをした。
さらに、風邪をひき熱を出した。

まとめ

傘は重要である。帽子があるとさらに良い。
健康第一である。

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	雨の降る日に	0 pt	10 位	1 sp
		傘に、レインコートに、雨に僕——4度の問い。起承転結のカタチを目ざしたのかなと読みました。構成が整っていて読みやすいけれど、いちばん読後感を左右するラストの部分がちょっと弱いかな。「僕は雨が降るのを待っていた」のあと、なぜ？ という説明がないとシリキレトンボの感。 特別賞：意味ありげで賞（オチがよくわからない）		
A02	雨乞い	5 pt	7 位	0 sp
		雨乞いvs晴乞い。なあんだユメオチかあ、と思いきや、悲劇はいきなり我が身にぐさり。その安心から絶望への転換がドラマティックでドキドキします。合わせ鏡の世界観。イメージ喚起力もゆたかでした。 語りすぎないのも本作品の良さと言えるでしょう。せっかく言葉を刈り込んで、こんなにコンパクトに仕上げたのに、字が小さいのがほんとに残念。		
A03	雨宿り	9 pt	4 位	1 sp
		いきなり「うちに来る？」はハゲしいあなとびっくりしてると野良犬オチ。雨粒みたいにずっと着地して、前半のしみじみパートをうまく受けとめてほのぼの。 しかし、この野良犬君、バスのあとを、いっしょうけんめい追いかけたのでしょうか？ それはそれでたいへんそう。 特別賞：デジャブー賞（どこかでみたオチであるから） イチオシフレーズ：「そんな君を好きになったんだ。」		
A04	明日天気にな……	8 pt	6 位	3 sp
		前回開花した忘れな草テイスト（勝手に命名）全開！ 作風が安定しているというか、変化なしというか。 雨とブランコ、描写は巧みだけど、ちょっとお約束すぎて、うーん、この作者さんの描写力なら、もっと妙ちくりんな設定にすると傑作が誕生するんじゃないかなあ、と高度な注文、出してみます。 リストカッターを倒したあとは、自分との闘いだ！ 特別賞：涙が雨で隠れて（萌えた）ときめいたで賞/くさすぎ賞/作者出てこいやアー!!賞（作者の実体験だとしたら許せない） イチオシフレーズ：「バカ、謝らないでいいんだよ」		
A05	傘っておかしくね？	23 pt	1 位	1 sp

		さくっと入ってくるタイトルが、しっかり本文のキーフレーズにもなっている構成のワザがおみごとでした。 急な雨に小さな恋の傘が開く。なんだか、このそぼく&いっしょうけんめいトークを、一緒に傘の中で聞いているような親しみやすさ。ハッピーエンドの予感が、ここちよい読後感につながります。好感を呼び込んでの首位、おめでとう!!! 特別賞：なると賞（良純がよかった） イチオシフレーズ：「傘っておかしくね？」×2
A06	If	2 pt8 位0 sp 緑の逆襲。雫の一滴で終わる幕切れが鮮烈な印象を刻みます。 すごい文章力ですが、わけても「音」の配置のうまさになりました。「木葉の囁く旋律」「潰れた小さな声」、映像的な描写の要所要所に「音」が差し込まれているおかげで、読者がとても想像力をかきたてられます。 まことに瞠目すべきイメージ喚起力でした。これでお題が「緑」だったらカンペキ！
A07	本心	0 pt10 位1 sp 投げやり感の演出でしょうか。雨の日はめんどくさい、という意図？ 特別賞：お手軽で賞（読むのが楽だったから） イチオシフレーズ：「あーめんどくせえ」
A08	ことわざ一口解説講座	18 pt2 位5 sp ほんとに、一口だなあ。 それだけに、インパクト巨大でした。ご本人もびっくりの2位快挙+最多特別賞（8班制覇）+イチオシフレーズ大賞受賞です。おめでとう!! 特別賞：直田丸麻紀（じかたまるまき）賞（カリスマを感じさせるインパクト）/哀川賞（インパクト）/あえて長澤まさみ賞（ざんしん！）/僕は森光子賞（長澤まさみが好きだから）/ありえないで賞（ここまで自分の趣味を大っぴらにできる人がうらやましい） イチオシフレーズ：「雨降って直田丸麻紀」×3 「泣きっ面に長澤まさみ」
A09	「魔が差す」もとい「正義が差す」	9 pt4 位1 sp わはははは。誰でもなれる即席ヒーロー。 胸ポケットのピピピで笑わせたあと、ニセヒーローが、自分のついたウソに自分でほろりとしてしまうラストにしみじみ。 設定の妙といい、支える哲学の深さといい、グレート！のひとことです。 特別賞：ヒーロー賞（青年は間違いなく少年のヒーローである） イチオシフレーズ：「正義は語るもんじゃない」「ゼロレッド」
A10	日本の将来が危ぶまれる理由と現代の若者の心	15 pt3 位1 sp 雨→虹→二次元と連想して、もう聖地まっしぐら。 そのわりに、ちゃんと「日本語」で語っているの、まだまだ軽症、現実復帰の可能性大、と見た！ おだいじに。 特別賞：オタク賞（イメージしていた東工大生とフィットしたから） イチオシフレーズ：「例：○○たん萌え - 」×2
		0 pt10 位0 sp

A11	RAIN BOW	小さな悩みが少しずつ寄り集まって雨になる。流れてしまえば二次、もとい虹が待つ。 一文一文ていねいに推敲し、自分自身を励ますような普段着トークが親近感を誘います。応援したくなるような好感度大の仕上がりでした。 イチオシフレーズ：「ごめんなさい、友達のままで...」
A12	酸性雨について	1 pt 9 位 1 sp 髪の毛君。身を以て酸性雨の被害の被験者となる。 そのケナゲさ、涙なくしては読めませんね。実験レポスタイルのシンプルさ、敢えてどーんと余白をあける演出、ブラボーでした。 特別賞：レポート賞（一回でもいいから、レポートをこんな感じで済ませたい）

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	地球 戦隊 アースレンジャー	25 pt 2 位 8 sp 史上最強の表紙、キターーーー!! もとい。おもしろさはもちろん、歌詞・ふりがな、デス・ひまわりと細やかな造りこみが、ほんとにすばらしかったです。 特別賞：ベストシンガー賞（ただ単にうたってほしい!!）/歌ってほしいで賞/続きが気になる賞（これがテレビ番組風の力か!!）/次回に期待で賞（東でやってほしい）/作曲賞/CANナオト賞（ベタすぎが良い）/レイアウトがよかったで賞（がんばった感）/気象（賞）（気象庁が出てきたから） イチオシフレーズ：「そして、明日の天気は...?」「- 注意報なんかじゃ未来は決まらない...」「運命のパラボラアンテナ!」×2 「嘘だっ! 嘘だああああああああっ!!!!」×2 ということで最多特別賞およびイチオシフレーズ大賞もゲットです。		
B02	滅び	0 pt 11 位 2 sp 友だちに話しかけられているような、とても親しみやすい雨さんトーク。窒素酸化物なんていうネタの入れ方もうまい。 さいごの1行、「こうして地球は滅亡した」が大げさでユーモラスですけど、ここだけ視点を変えて説明してしまうより、ずっと雨さんに語ってもらったほうが、この世界の中で完結して良かったのでは? 特別賞：究極の奉仕者賞（最後のオチでわれた）/気象（賞）（雨の偉大さを知りました） イチオシフレーズ：「こうして地球は滅亡した」		
B03	虹の架け橋 - 二人の物語 -	1 pt 9 位 1 sp 一作で二話分おいしいつくり。並行するけど交わらない。いや交わるのか。ユニークな試みで、きれいに仕上がってまいるのですが、何度か読み込まないと二つのお話の関係性がたどれないところが難です。 私は、上段の春の笑顔さんが下段の「女の先輩」に該当するのかなと思ったのですが?? 特別賞：塩原賞		
B04	- 私、雨、記憶 -	2 pt 7 位 0 sp 夢うつつのぼんやりした思い。求めて手を差し伸べても、儚く溶けてしまう幻影。その一瞬をていねいにあざやかに見せていただきました。 ただ、イメージだけの感があって、それこそつかみどころがなくってしまうので、旅を続ける「私」の個人史をもう少し見せると良かったのでは。		
B05	雨降る星空	1 pt 9 位 0 sp 雨なのに星、なぜ? ああ、おんぼろプラネタリウムなのね、とタネアカシにナットク。 親しみやすいつくりですが、「懐かしい」と語っているあたり、これだけでは伝わらないので、郷愁をかきたてるエピソードをピンポイントであしらうなどすると、ぐっと個性が出てグレードアップします。具体性の衣を身にまとう工夫。おためしを。 イチオシフレーズ：「プラネタリウム」		
B06	Top runner	10 pt 3 位 1 sp		

		23年という偶然の符合が人生の何かを変える。走り続けよ、我が人生。そして友よ、君もまた。 ていねいに組み立てられて、ドラマがふくらんできます。熱いラストもグッド。 ただ、19時半という時間設定が、タクシーを使うには早すぎて、もっと夜中のほうが挫折感も盛り上がって良かったのでは？ 特別賞：よく書いてるで賞（おしかった4位）
B07	守護神	0 pt 11 位 0 sp 人生のやり直しを決意させた雨。思考のプロセスがていねいにたどられているのですが、いきなり自殺撤回まで行くのは飛躍しすぎの感。小さな元気をもらった、くらいの押さえ方のほうが似合いそうです。 あと、B-2と同じで、これもさいごの1行は削って、全体を一人称トークでまとめたほうが統一感が出たのでは？
B08	A song of silence	6 pt 4 位 1 sp 世界から音が抜け落ちる——それまで背景だった雨がぐっと舞台前面に出てくるラストが絶大な効果で悲劇性を盛り上げて秀逸。 前半がリクツっぽかったか。 特別賞：「空気読めよ雨!!」（世界観がよかった）
B09	あまごい	6 pt 4 位 0 sp 軽妙なかけあいがこちよく、三日後というオチも笑えるのですが、どんなふうに雨乞いしてたかを見せていただけると、もっと物語に入り込めたと思います。 ラジオドラマ的に、「絵」が見えないで会話だけを聞いている感じ。 イチオシフレーズ：「それから三日後だった」×2
B10	「雨といえばカエルだろ」	32 pt 1 位 1 sp 残酷だ！ 動物虐待だ！ 「冷血動物」というフレーズがきっちり効いてストーリーを支えて、カエル君のキャラクターもしっかり立ってグレートでした。 わけて、昇天しちゃってからも語り続けた構想力がいいなあ。そう、たしかにニンゲンは冷血動物。まちがいない。 シニカル視点が効いて、デス・ひまわりの猛追を振り切ったの首位、おめでとう!!! 特別賞：そんなもんで賞（そんなもんだから） イチオシフレーズ：「バイバイ、冷血動物たちよ」×2 「雨といえばカエルだろ」「嘘つきどもめ。」
B11	蝉時雨	5 pt 6 位 0 sp 蝉時雨に蘇る三十年前の思い出。定番の病院少女の儂げなようす。ツクツクボウシで叶えた夢は輪廻転生？ 少女のセリフがありきたりなのが惜しいです。 ときに病院モノはTAの「弟子」さんがご専門として極めておられますので、ぜひ、アドヴァイスをいただいてみてください。お茶会で「おりづる」と叫べば、召還できるはずです。
B12	土砂降りの日に、	2 pt 7 位 0 sp 雨が好き。傘の中で、傘の外で。同じ状況でも、人によっていろんな意味づけのしかたがあるのだなあと納得です。 ただ、上段と中段の対称性はうまくできていると思うのですが、下段の位置づけがよくわかりませんでした。傘をさして晴れの日に外に出るヴァージョンなんて並べてみたらおもしろいかな、とTAさん談。